ZoneF インクルーシブ　　〈対面開催〉

「個」の視点から教育を再考する
－育ち合う子どもたちとコミュニティー

共生社会の実現、多文化共生、ダイバーシティの推進など、多様性が尊重される社会の実現は、我が国における一つの大きな課題となっています。多様性の尊重はマイノリティや社会的弱者といった一部の人々に関する問題としてクローズアップされがちですが、そもそも、私たちはみなそれぞれがユニークな存在であり、多様性を彩る一員です。つまり、多様性が尊重される社会とは、全ての人があるがままに生きることが大切にされる社会に他なりません。そうした意味でのインクルーシブな社会の実現には、全ての子どもがあるがままの存在として生き、育つことのできる教育の取り組みが不可欠です。この困難な課題に立ち向かうため、実践研究福井ラウンドテーブル 2021　Spring Sessions において「ZoneF インクルーシブ教育」は立ち上がりました。そして、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions 以降は、『ZoneA　学校』とのコラボレーションによって、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる学校教育の在り方を探究してきました。その中で、一人ひとりの子どもに寄り添うこと、子どもの視点から学校の当たり前を問い直すことの重要性を再確認してきました。

多くの子ども達が共に学ぶ学校の中で、一人ひとりの子どもの思いを深く共有するのは容易なことではありません。しかし、一人ひとりの子どもに寄り添うためには、そして子どもの視点から学校や社会の当たり前を問い直すためには、一人ひとりの子どもの世界を知ろうとするまなざしを持つことが不可欠です。そこで、前回の実践研究福井ラウンドテーブル 2024　Spring Sessions では、ZoneF として「『個』の視点から教育を再考する-子どもと教師の接面を探る－」というテーマを掲げ、シンポジウム・フォーラムを開催しました。シンポジウムでは２名の方に話題提供をお願いし、それぞれの場で生きる個別具体的な子どもの姿を共有することを通じて、子どもの視点から学校や教育のあり方を探ってきました。いずれの話題提供においても、子どもが自己を位置づけることのできるコミュニティの存在の重要性が示され、個に寄り添うことと、個とコミュニティとの関係を編むことの両輪から教育のあり方を考える必要性が浮かび上がってきました。

しかし、個に寄り添うことと集団へのアプローチは時として両立困難な事態として私たちの前に立ち現われます。そこで今回の実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions では、個別具体的な事例の共有を通じて、個に寄り添うことと子どもが生きるコミュニティとの関係を編むことを問い直し、個とコミュニティの相互の育ちが実現するようなインクルーシブ時代の教育のあり方について参加者のみなさまと共に探究していきたいと思います。

日時：2 月 22 日（土）13：30-17：00
会場：AOSSA（福井県福井市手寄１丁目４－１）福井市地域交流プラザ 6F 研修室

13:30-13:40　〈Session０〉オリエンテーション

13:50-15:15　〈SessionⅠ〉シンポジウム

話題提供	豊中市立南桜塚小学校	教諭	中田　崇彦　氏
話題提供	福井大学教育学部附属特別支援学校	教諭	岩佐　成樹　氏
コーディネーター	福井大学連合教職大学院		廣澤　愛子

15:35-16:55　〈SessionⅡ〉クロスセッション

話題提供を踏まえ、小グループ形式で語り合います。個に寄り添うことと子どもが生きるコミュニティとの関係を編むことの両輪から、それぞれの実践者が直面している課題や取り組みの中で見えてきたことを捉え直し、明日への展望をひらいていきたいと思います。